

2009年度早稲田大学本庄高等学院学校評価
第三者評価報告書

2009年度早稲田大学本庄高等学院学校評価の第三者評価は、埼玉大学教育学部教授小林聡氏、立教新座高等学校教頭澁谷壽氏、上智大学文学部教授瀬間正之氏を評価委員に委嘱して実施した。評価は2009年度自己評価報告書、2009年度学校関係者評価報告書を始めとする下記の資料の検討、9月25日（土）に本学院で実施した学校評価運営委員からの聞き取り、及び施設視察によって行なった。小林氏は埼玉県内の国立大学教育学部教員の立場から、澁谷氏は県内の大学附属高校という本学院と性格の近似する学校の教員の立場から、瀬間氏は附属学校をもたない私立大学の教員の立場から、それぞれ独自に評価した。

調査資料

2009年度早稲田大学本庄高等学院自己評価報告書
2009年度早稲田大学本庄高等学院学校関係者評価報告書
本庄高等学院学則
進級・卒業基準
学期成績・学年成績の記入について
生徒表彰規程
奨学生の選考に関する内規
学内奨学生の候補者選考に関する内規
保護者の会会則
保護者の会会計規則
同窓会会則
後援会会則
研究紀要投稿規定
卒業論文を書くにあたって（2009年度）
学院案内（2010年度・2011年度）
入学試験要項（2010年度）
学院生活のしおり（2009年度・2010年度）
学院行事予定表（2009年度・2010年度）
委託ホーム概要
ホーム生活の手引き（2010年度）
緑風－早稲田大学本庄高等学院通信（25号・26号・27号）
杜－保護者の会だより（33号）

各評価委員による評価報告は以下の通りである。なお掲載順は氏名の五十音順とする。

I. 埼玉大学教育学部教授 小林聡

1. 立地条件、及び入学試験について

本学院は埼玉県北部の自然環境の中で、各施設が森の中に点在するという恵まれた環境を持つ。卒業後、都会にある各学部に進学することを考えれば、高等学校の多感な3年間で自然の中で過ごすこと自体、様々なメリットがあると思う。

次に入学試験についてであるが、少子化に伴い、小中高大を問わず、全国的に入学試験に関しても様々な問題が起こっている。本学院では地元指定校・一般指定校の推薦を活用するほか、男女共学化を行なうなど、様々な努力を行なっていることがわかった。今後、本学院の位置する埼玉県北部の中学生に対して学院の魅力をアピールして受験者を増やしてほしい。また、ヒアリングの際に、男女共学化して以降、様々な点で女子の活躍が目立つという話が出たが、女子定員の増加なり、女子生徒にとって魅力のある教育なり、様々な形で女性にアピールする試みも行なっていくべきではないかと思う。

合否発表後のいわゆる「手続率」は、男子が2010年度では2割強、女子が3割5分と必ずしも高くはないが、担当の教員から、この点については問題ないというお答えをいただいた。

2. 学校生活・教員について

各教室はいずれも落ち着いた雰囲気、リラックスして学べるようであった。また、利用できる体育館も複数保有するなど、スポーツ施設も充実している。ただ、これだけ多様な設備を整えているのであるから、武道場もある方がよいのではないかと考える。食堂は清潔で、かつ余裕を持った作りであり、生徒が食事時間を楽しめる空間であると感じた。

また、本学院は早稲田大学の附属高校であることもあり、高大連携に積極的に取り組んでいる。学部説明会、サマーセミナー、ウインターセミナー、あるいは人間科学部によるオンデマンド授業など様々な機会を生徒に提供し、それによって高校生に自分に最も適した学部を選ばせるための工夫が凝らされている。

一方、各教科の教員の部屋を拝見したが、全ての教科について図書など設備品が充実しており、各教員が十分に教育内容を練ることができる環境にあることを感じた。また、各教員が、多忙な中で精力的に論文を発表し、学術上の成果を挙げている点に感銘を受けた。これは、各教員の力量もさることながら、学校側が、教育と研究を両立しうるように教員をサポートしていることの証左と言えよう。

専任教員の年齢構成を見ると、51～60歳が35%であるのに対して、21～30歳が12%と、日本の高校教員の一般的な現状と同様、やや「高齢化」の傾向が見られる点が気付きである。20代の非常勤講師が多いので、生徒から見れば年齢構成上のバランスはとれているように見えるであろうが、やはり、専任教員においてバランスのとれた年齢構成であることが望ましいであろう。

3. 卒業論文について

本学院の特徴の一つとして、卒業論文を課していることが挙げられる。卒業論文作成の指導はきめ細やかに行なわれている様子がわかったが、やはり、様々な点で生徒にも教員

にも相当な負担がのしかかっていることも同時にうかがえた。しかしながら、自分で研究テーマを選び、材料を集め、剽窃をせずに自力で論文をまとめていくことは、大学進学後の生徒の将来を考えると貴重な経験になると思われるので、今後も卒論指導のノウハウを蓄積していただきたい。

ただ、大学教育における個人的な経験から私見を述べさせていただければ、自由な発想を重んじる一方で、高校3年間の中で、「型にはめる」方式の教育も一定程度は必要かとは思ふ。両者の理想的なバランスを考えていただければと思う。

4. クラブ活動・課外活動・修学旅行について

文化系・体育系ともにクラブの施設は充実しており、また、極度なクラブ活動重視に走らず、勉学との両立が保たれているように感じた。また、課外活動として体育祭・稲陵祭・球技大会・マラソン大会など、年間に多くの行事を開催しているとのことであり、団結心や愛校心の育成にとってもプラスになっていくことと思われる。

修学旅行の行先として、近年、北京・台湾・韓国を選んでいるとのことであったが、単なる観光にとどまらず、行き先の同年代の青年とスポーツ交流・授業交流など、有意義な活動を行っており、今後の国際化、あるいは国際情勢の変化に適応しうる人材の育成という観点からも重要な意味を持つと思われる。

5. 卒業後の進路について

早稲田大学の附属高校であるため、全員が早稲田大学のいずれかの学部に進学することができる点は、本学院最大の魅力である。それだけに、どの学部に進学するかは重要な問題といえる。前述のように、本学院は様々な機会を設けて各学部をアピールしているが、いわゆる「理工系離れ」が進行している様子が、各種資料やヒアリングからうかがえた。2009年度の実績で見ると、理工系の3学部に進学する生徒が3割に満たない状況であり、生徒が自然科学系の学問に興味を持つような授業やカリキュラムをいっそう充実させればとも思う。

Ⅱ. 立教新座高等学校教頭 澁谷壽

9月25日(土)に学校評価運営委員に対する聞き取りが行なわれ、その席で高校教育での様々な活動、工夫されているところ等、丁寧に説明を受けた。また、自然あふれる広大なキャンパスも見学し、その中でのびのびと学校生活を送っている生徒の姿も見る事ができた。それに先立って、学校自己評価報告書、学校関係者評価報告書等、様々な資料をいただき、大部分の生徒が推薦で大学に進学する学校の利点と悩みについては、共感を覚え、共有すべき問題のあることも理解することが出来た。

全体として高等学校教育が高いレベルで実施されており、附属校ならではの大学との連携もあり、生徒の能力を伸ばす工夫や仕組みが様々にあった。選択科目制度・卒業論文・学部開放科目・オンデマンド授業等がそれにあたる。

諸行事も体育祭・稲稜祭・球技大会・秋の学年行事・芸術鑑賞会・マラソン大会・人権学習等、学校生活を豊かにしている。早慶戦観戦のように帰属意識を持たせるための行事もあり、工夫されていると思われる。

共学の完成年度にあたり、その評価も気になるところであるが、大きな歪みもなく、女子の元気さが保たれているところは教職員の様々な準備、苦勞の成果と思われる。ただ気になる点は、女子教育の視点が明確でないように感じられることである。共学のメリット、また男子学生の変化も理解はできるが、どのように女子を育て、どのような女性を目指しているのか、学校全体として理念の共有がさらに必要のように思われる。

入学試験については、一般入試・帰国生入試・ α 選抜・I選抜・さらに地元指定校、一般指定校と様々な入試制度で生徒募集を行なっており、入学してくる生徒の質の確保、志望動機の高い生徒の確保に力を入れている様子がたいへんよく理解できた。この努力が、入学後の質の高い授業を支える大きな要因にもなっていると思われる。

委託ホームについては、立教高校(現立教新座高校)が3棟の寮に約300名の寮生が生活していた時期もあったが、様々な要因で寮生が減少し、ついには閉寮となった歴史を踏まえると、注目されるシステムである。施設維持の難しさ、生活指導も含めた通学生にはない様々な指導上の問題の発生しやすさのため、存在自体に疑問を感じる教職員もいるであろうが、他の学校にあまりないシステムがあるということは、大きな財産であると思う。立地条件による必要性から設置されたとはいえ、苦勞しながらも今日にいたっているシステムをむしろ強みとして生かしてはどうであろうか。地方枠のようなものを設けるとか、地方の代表的な学校のいくつかを指定校にしてみてもどうであろうか。生徒にとっても同期生の中に地方の友人が多くいることは大きな財産になるように思われる。

それ以外の部分でも、建学の精神に基づき、誇りを持った生徒を育てる努力が為されていると思われる。今後もその良さをさらに伸ばす努力を継続していただきたい。

Ⅲ. 上智大学文学部教授 瀬間正之

1. 教育活動

必修科目・選択科目ともに適正に運営されている。とりわけ、特徴的なカリキュラムは第二外国語の充実と卒業論文に見られた。以下この二点について述べる。

①第二外国語

3年生の選択科目として第二外国語を6科目置くことに特徴が見られた。受講者も中国語約60名、朝鮮語40～50名、ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語各20～30名と充実している。また、中国語・朝鮮語は修学旅行との関連もあり、有益に機能している。但し、石神井の高等学院が、1～3年まで3年間の必修科目であることを考慮すると、今後さらなる充実も見込まれる。

②卒業論文

2年生の秋にテーマ登録し、1年間の指導があり、中間報告も行なわれている。高校生に対して、学問への動機付けが十分に成されていると言える。但し、以下二点の問題を覚えた。

第一に、指導に教員間で温度差があるように感じられた。教員1人当たり、2～20名という学生数にばらつきが見られること、また、主として正規の授業時間以外に指導を行なっていることなど、指導教員の負担にもばらつきがあるように見受けられた。毎週は困難としても、隔週に一度授業時間内に卒論指導の時間を設けるなどすると、指導の均一化がはかれるように思う。

第二に、現在、評価を指導教員のみで行なっている点が、評価の公平感を思えば、副査の導入の一つの方法かも知れない。

2. 教員の研究環境について

教員の研究成果が2009年度は論文16点、学会発表8件と2008年度に比して3倍近くに増加していることは高く評価される。

また、15年に1度、年間3名について、特別研修が1年間認められるという制度は、高校にあっては稀少であり、積極的な運用が望まれる。年間3名の枠がありながら、本年度は2名のみの適用であり、1名の欠員があると伺ったが、学生に卒論を課すことから、その指導にはこうした制度の積極的な運用と活用が望まれるとともに、週に1日確保されている研究日も有益に活用されることが期待される。

研究室も各教科ごとに十分なスペースがあり、パソコンなどの機器も完備されている。

3. 教育施設について

体育館・運動場の充実に比して、手狭な教室も存在した。現在新校舎建設中であり、この点も配慮もなされることが期待される。

4. 課外活動について

運動部・文化部ともに生き生きと活動する姿が見受けられた。一般の進学校と異なり、大学受験という足枷がないせいか、課外活動も積極的に行なわれて、充実していることが

うかがわれた。また、視察の折、来客者に対して元気な声で挨拶する学生が多く、基本的な生活習慣も身につけていることが確認された。

5. 学生の受け入れ

一般入試のほか、 α 選抜、I 選抜、帰国生入試など、多種の入試を行ない、それぞれ特色のある学生を受け入れている。中でも地元密着型の指定校推薦は特色ある入試となっている。半面、少子化・難関化に伴い、当初40%台であった一般入試合格者の入学率が、このところ20%台に落ち込んでいるという。受験者の併願率が高く、東京受験も実施しているため、ますます東京の難関私立高校との併願化が進む傾向が予想される。また、通学圏内の埼玉北部・群馬南部はいまだに公立高校志向が根強い。一般入試合格者は定員の半数という説明を受けたが、今後も多彩な受け入れ体制を強化していく必要性が認められる。

6. 交通手段（スクールバス）について

本庄駅と寄居駅発着のスクールバスが委託業者により運行されている。悪天候及び列車の遅延については、臨時便で対応しているとのことであるが、寄居便の1台の定員が80人という状況は改善が望まれる。すし詰め状態での通学は、高校生とは言え体力の疲弊が懸念される。

以上、言及しなかった項目も含め、総合的に見て適正な学校運営がなされていることが確認された。